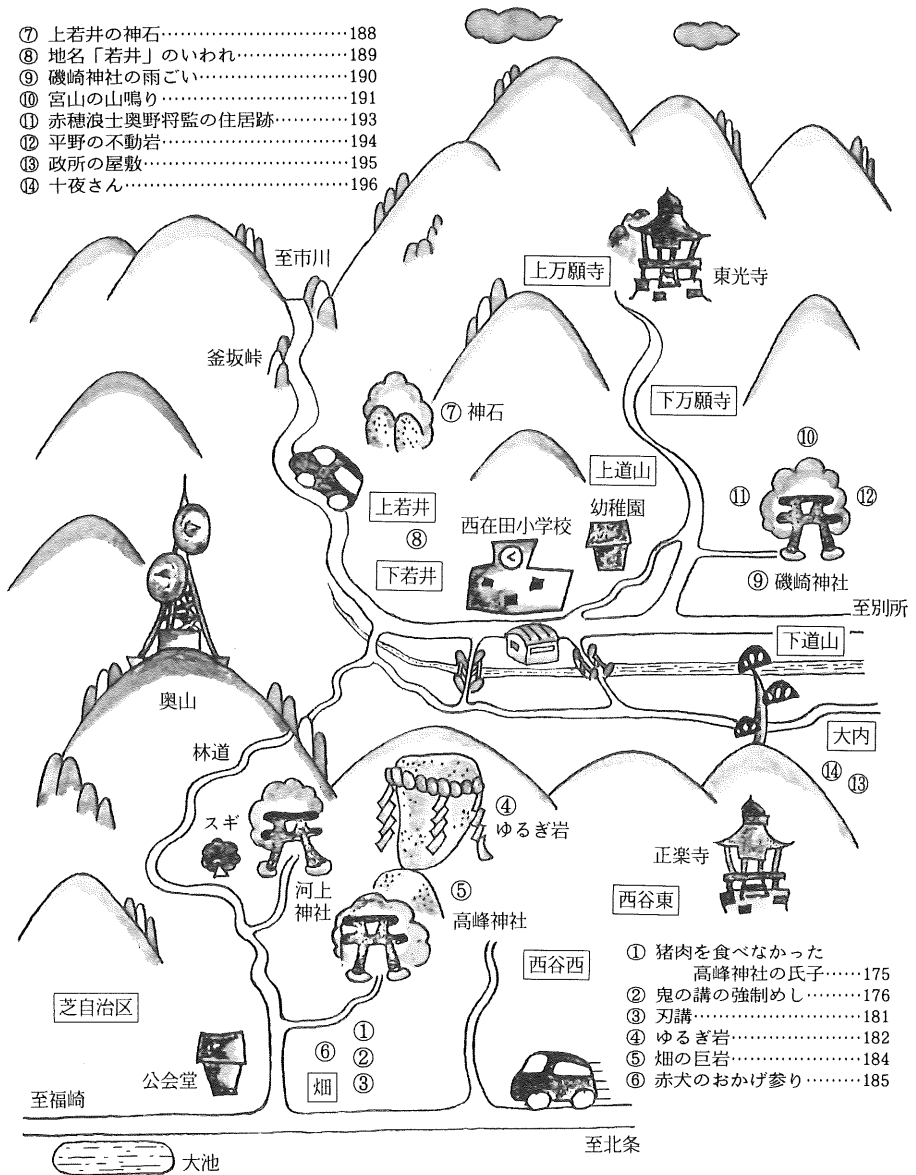


# 9 ゆるぎ岩と北部の山波 10.0キロメートル

- ⑦ 上若井の神石.....188
- ⑧ 地名「若井」のいわれ.....189
- ⑨ 磯崎神社の雨ごい.....190
- ⑩ 宮山の山鳴り.....191
- ⑪ 赤穂浪士奥野将監の住居跡.....193
- ⑫ 平野の不動岩.....194
- ⑬ 政所の屋敷.....195
- ⑭ 十夜さん.....196



- ① 猪肉を食べなかつた  
高峰神社の氏子.....175
- ② 鬼の講の強制めし.....176
- ③ 刃講.....181
- ④ ゆるぎ岩.....182
- ⑤ 畑の巨岩.....184
- ⑥ 赤犬のおかけ参り.....185

・ゆるぎ岩（市指定天然記念物）

岩の上に直立した巨岩で、人力で押すと、揺れ動くので、「ゆるぎ岩」「ゆすり岩」といっている。

## 猪肉を食べなかつた高峰神社の氏子（畑町）

畑町にある高峰神社は、大昔は奥山の頂上にあつて、たいそう豪壮なものであつたといひます。

今でも奥山には、三段に整地した広大な社殿跡と思われるところがあつて、大きな井戸の跡も確認できません。それに遠く飾磨港の浅瀬と、印南郡志方町の中心に大鳥居があつたといひ伝えられており、土地の人は、畑の宮の鳥居跡と今も呼んでゐるそうですから、いかに大きなお宮であつたかがい知ることが出来ません。

ところで、この高峰神社の氏子の畑・西谷・窪田の人たちは、猪肉を絶対に食べなかつたのです。それは、猪いのししが高峰神社の祭神のつかいであり、神様はいつも猪に乗つておられるといひ伝えによるものです。もし猪肉を喰おうものなら、ただちに口が歪ゆがんでしまい、はらわたが腐るといひます。本人には異常がなくとも、子どもにも不幸な子が生まれるといひますから、おだやかではありません。

旅先で知らずに猪肉を食べさせられたために、あわてて旅行をきり上げ、引き返して来て神主に清めてもらつた人さえあるくらいです。

勿論、今ではこんな迷信を、本気で信じてゐる人はないのですが、高峰神社の氏子にとっては「ボタン鍋」をつつくのには、なかなかの勇氣があるようです。

（宮永春雄氏の話より）

## 鬼の講の強制めし（畑町）

「一日三升のごはんを食べてしまわないかん」言われたら、お前どうする。

「……………」

「そんなあほなことができるはずない……………」と、そういいたいのやろ。そうや、誰が考えてもおかしなことや。

腹がもう、いっぱいだなあ。今にもはじけそうになつとんのに、それでもまだ口の中へねじこむようにして、喰わなならんよ。そのかわりでもあるまいが、涙がポロ、ポロこぼれてなあ……………」

実はな、この畑の東垣内には、つい最近まで鬼の講というものがあつてのう。百五十年も前にもうすでにやつていたそうやから、ずい分長く続いた行事やつたんや。

何でも、昔、畑の奥山に、高峰神社というそれはそれは立派なお宮があつたそうやが、このお宮では、毎年氏子たちが集まって、鬼追い式をにぎやかにやつていたんだという。ところが、どうしたことかある年、この鬼追い式に使う大切な鬼の面をなくしてしまつたんだ。それで、これに責任を感じたためかどうか、鬼面供養くようだといって、この鬼の講というのが始まつたんやそうや。

この鬼の講というのはなあ、東垣内七十戸ばかりが講中になつて、交代で七百九十平方メートルばかりの

講田で稲をつくり、その収穫米でごはんをたいて、講中全員で大めしを喰う行事なんや。

毎年一月九日に行っていたんやが、くじ引きで決めた講元の家へは、前日から当番の講中五、六人が集まって来て、座布団・火鉢などを持ち寄る一方、七十人前の膳、椀を出して本膳の用意をし、当日の副食にと、味噌汁・つけもの・大根と人参の生酢合え・イワシの竹串焼の焼物をこしらえたんや。他の副食は、いっさい出さず、勿論一滴の酒も出さない習わしやった。

当日になると、早い客は午前三時頃からポツ、ポツ来はじめ、遅い客は普通朝食頃に来るといった具合で、まちまちやった。

来客は、まず真っ直ぐに床の間に進み、うやうやしく安置してある講の御霊に礼拝をすませることになっていた。ところがなあ、この御霊というのがふるっているんや。何のことはない、今までに講をすませた家を順番に記入した帳面が入れてある箱なんや……。

講元に対して挨拶をすませたら、配膳してある所にすわる。全員が席につくと、大桶に入れてあるめしが座敷に、デーンと運びこまれ、いよいよ「しいめし」の始まりや。

めしの給仕には、いろいろ厳しい掟があつてなあ。その掟を破ることは、絶対許されないことやった。まずめしを椀に盛る時は、必ず他の客にやってもらい、自分勝手に盛るわけにはいかんのや。

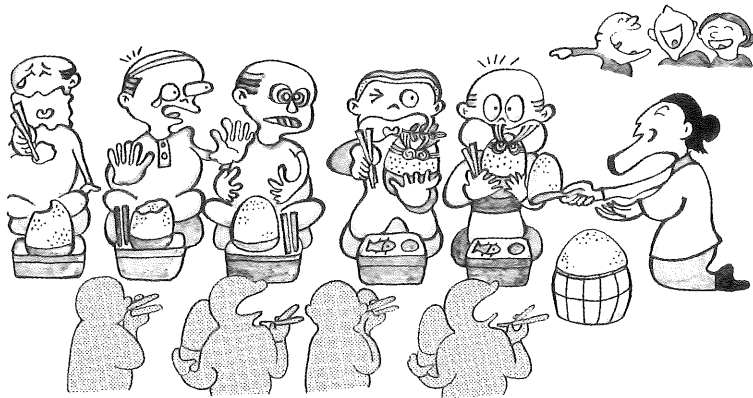
その上、必ず一椀では許してもらえず、二椀に盛ってもらうことになっており、かといって三椀目のおか

わりも出来ないしきたりで、

まず、一椀目は、その大きなめし椀に山盛り入れてくれる。それを上の部分だけ食べて、二椀目を隣の席の者に要求するわけだが、これからがいよいよ大変なんや。椀にそれこそ出来る限りの量のめしをつめこむんやからな。中でも、最近結婚したものや、家を新しくした者など、何でもめでたいことがあった者が、二椀目を出すとそりゃあ、えらいことが始まる。みんなでお祝いだといって、無茶苦茶に注いでくれるんや。注ぐというより、ありゃ積むんやな。みんなはお祝いというが、全く面白半分や。重箱などを利用して杓子しやくしや箸はしで、めしを押し固め、廻転焼のような形に作ったものを、五段も八段も積み重ねるわけや。

一番上は剣先といって、とがった形をこしらえる。ごていねいにも南天の葉や、紅白の水引までつけてて、四人も五人もが、倒れないようにと四方八方から箸や杓子で支えながら運んできては、

「おめでとう、お祝いしますのでどうぞ召し上って下さい」



と、目の前にすえるんや。

客はめしの量が多いとか少ないとかは、絶対にいえないことになっている。だから、めしの高さが五十センチにもなることがしばしばあった。倒れて畳の上へこぼれないようにと、重箱などを一列に並べて、受けとめる準備までしてくれるんや。

うけとった客はなあ、このごはんをみんなのこらず食べてしまわないかんだ。一人でも残している者があると、その日の講は終らんのだから、みんな必死やった。

急いで押し固めためしをほぐして、食べられるだけ無理に食べるんやが、一度にはどうしても喰いきれん。そこで、ウン・ウンうなりながら、家に帰って重労働をしては腹をへらし、また喰いに行くといった具合に、一日に何回となく家と講元の間をいききしては喰うわけや。

わしもなあ、嫁をもろうたその年やった。三升ほども盛られて、そりゃ困ったもんや。やっとこさ喰い終って、講元に礼の挨拶をしたのはいいが、めしがのどからゴロ・ゴロ出て来てなあ、今もよう忘れんわな。

それでもようしたもんで、強制めしのために胃を悪くしたというようなことは聞かんだが、講の日が近づくと、二日も前から食事をせんと、その日に備える者もあったそうや。

みんなが喰い終ると、やれやれというわけで、祝詞のりとを上げて終るんやが、実は終りにもう一つ大変なことがひかえていたんや。

それはなあ、次の年の講元を決めることなんや。くじで決めるわけやが、講元になると必ず不吉なことが起こるといふんでな……。

家族の者が死んだり、大けがをしたりなあ。牛や犬が死ぬとか、火事がおきるとか……。みんなはそれを信じていたんや。偶然やったんやろうが、実際に人が死んだり、牛が死んだことがあるんや。わしが講元を受けた時も、講の日の七日前、一月の二日になってから、かわいがっていた犬が病気もしていないのに、コロッと舌をかみ出して死んだんや。

そんなわけで、みんなは

「何とか自分にくじが当たりませんように」

と、口には出さなんだが、心の中では必死やった。

こんなつまらん、人さわがせな行事やったが、「やめると罰ばちがあたる」というてのう、なかなか変えられなんだんや。

思いきって改革した今は、別に罰も当たったようにないので、まあ、もう『おわらいもの』になってもうたがなあ……。

(宮永春雄氏の話より)



## 刀講（畑町）

毎年一月十七日に、畑町の安富姓の家では、風がわりな「講」がおこなわれている。

講中は安富姓を継ぐ現在二十二戸の一族で構成され、講頭の家が集まった人たちは、早速黒ぬりの古めかしい木箱から、一振の大刀を取り出して床の間に置き、それをおごそかに礼拝する。

何でも、この刀は安富一族の先祖、安富形部太輔親豊という人の愛刀であったらしい。一月十七日はこの人の命日に当ること、刀はしたがってこの先祖の象徴である。

一度ぬけば、必ず血を見ないではおさまらないといい親豊が戦国時代の人で、故あって帰農し、この畑村に住みついて安富家を興したという言い伝えと思えば、農業に専心するようという先祖の親心とも受け取れる。

昔は、この刀講にもいろいろ細かいしきたりや作法があったらしいが、一時はこの刀も売りに出されようとした程で、今は一族が集まって会食しながら、親睦と連帯を深めることが主目的で、この日には親豊の墓



の掃除も行っている。

「安富家一門は、何れもその昔をたずねれば、各同一の先祖にして、古来わが同一門は、何事によらず和合親睦を旨とし、ともかく一致し……」

で始まるこの講中の規約ごとを記した文書には、「凡り事一体に係る事件は、何事にても一門熟議をとげ、幸福を謀ることを務とする」、「一門のうちに不幸がある時は、講中で必ず援助をおしませぬこと」と、一族の協力と相互扶助をうたっている。

刀には「備前長船清光、天文二十年八月」の銘があり、安富一族の墓所には、安富形部太輔親豊の墓印が刻まれている。

### ゆるぎ岩（畑町）

ゆるぎ岩は、畑町イナギ谷にある大岩で、昔から神石として里人にあがめられているものです。

この岩は、高さ四メートル、上部が尖って中程がふくらみ、下部が細くなった立卵形の岩で、ふくらんだ中央部の周囲は八メートルもあります。この岩の下にまた大きな岩があって、重ねて置いたようになってい

ます。上の岩を押すと揺れ動くので、「ゆるぎ岩」の名がついたのです。

このゆるぎ岩について、昔から次のような話が伝えられています。

法華山一乗寺を開いた法道仙人は、加西市でもたくさんのお寺や霊所を開きました。

この畑町にもやって来て高峰山に登り、お祈りをいたしました。すると夜明け頃、どこからともなく、「われは猿田彦命さるたひこのみことなるぞ、なんじ村人守護のために、イザナギ・イザナミの命なむことの神をまつるべし」という神のお告げが聞こえました。

法道仙人は、さっそくここにお宮を造りました。そして、もし悪人がいれば心を入れかえさせて、善人にしてやろうと誓ちかひを立てました。そこで善人が悪人かを見わけけるために、この大岩に向かって呪文をとなえ、仙人自らこの岩を押し揺がし、

「これより後、善人が来てこの岩を押す時は、この岩はたやすく揺り動くであろう。しかし悪人が来てどんな大力で押しても、この岩はびくともしないはずじゃ。この岩を押



して動かない時には、自分に邪心じょうしんがあり、やがて神仏の罰を受けるものと心得て、さっそくこのイザナギ・イザナミのお宮に詣でて罪悪をざん悔げし、正直慈善の人に立ちかえりなさい」と、里人につけて立ち去ったということです。

その後、里人がかわるがわる岩を押ししてみました、仙人の言葉どおりでしたので、だんだん靈石としてあがめるようになりました。なお、「イナギ谷」は「イザナギ谷」の訛なまったものです。

みやまなる たきのかたへの ゆるぎ岩 ゆりすぎわたる河上の岩

(加西郡誌より)

## 畑の巨岩(畑町)

畑町河上稲荷は、大昔からこの高峰山に鎮座ちんざされている勝負の神様ですが、ここには名高い巨岩が二つあります。一つはご神体となっている岩で、京都伏見稲荷、生野青倉神社とともに巨岩がご神体になっていることで有名です。もう一つは、境内にある鏡岩と呼ばれる岩です。これは、まわりの景色が岩の面に映ると

いう不思議なものです。

なお近くのイナギ谷（イザナギ谷）には伝説の岩「ゆるぎ岩」がありますから、畑には合わせて三つの有名な巨岩があることになりました。ところで、このイナギ谷には、どんな干旱にも清水のたえることがないという泉もあり、この水は汲んで帰って常用すると万病にきくといいつたえられています。

（山崎茂氏の話より）

## 赤犬のおかげ参り（畑町）

明和八年（一七七二）、加西郡畑村のアカという犬が、お伊勢さんへおかげ参りに出かけました。五月二十八日夜、畑村の孫八ら五人が抜け参りに出発、アカも同行したのです。ところが、京の清水坂ではぐれ、手をつくしてさがしましたが見当らず、五人はそのまま参宮をすませ、六月十日に下向してしまいました。村では、飼い主をはじめいろいろと心配しましたが、何の手がかりもありません。

ところが、同じ月の十七日、村はずれの千軒寺へ旅人の接待茶をたきに出ていた牛飼いの三八が、息せききって帰ってきました。おかげ参りと思われる男が、アカにまぎれもない犬を引いてやってくるというので

す。日頃案じていたこととて、家中・近隣が総出でむかえに走りました。そのようすは、人間の下向よりもにぎやかだったそうです。



犬はたしかにアカで、その首には、かたじけなくも内宮・外宮のお札ふだが渋紙につつんでしっかりと結びつけてありました。引き手は、備後の国（広島県）福山城下三丁目の吉蔵という男でした。吉蔵の話では、下向の途中に伊勢の国（三重県）の津を通りかかると宿場役人によびとめられ、「播州加西郡畑村のアカ」の札をつけたこの犬を託されたといえます。吉蔵が聞いた人々の話を集めると、次のようなことでした。

犬は京の清水坂あたりでいきりに人をさがすようすで、参宮者らしい人が通りかかると、後をついてきました。

「さては、犬ながらもお伊勢参りを願っているのだな。」

と、道中の同情を集めつつ宇治山田に着き、ぶじに参宮をはたしたのでした。

ふだんお伊勢さんでは、宮川より内へは犬を入れませんでした。しかし、畜生ちくしやうながら神をうやまう気持ちの厚いのをめでて、とくに内宮

までの参入を許されました。ご本宮の前で参拝をすませますと、神官がお札をアカの首に結びつけてくれたといひます。

この犬は、道みち人びとの世話になり、宿にとまれば自分の首につけた袋から、宿銭を払わないと、いっさい食事をしなかったそうです。津の役人が袋を調べますと、道中での喜捨きしやが六百文あまりもありました。犬ながらも、けっしてけがれたものを食べぬ精進しょうじんふりは、人間以上だともうわさされました。

アカの下向を喜びむかえた村人たちは、犬の参宮は前代未聞みもんと、驚くやらあきれるやら。とにかくお札をと、津のお役所への礼状を、おかげ参りの者に託したと伝えていきます。

(横田大次郎氏蔵「御影参宮犬之記」による)

(註) 「おかげ参り」は、江戸時代の人たちの爆発的な伊勢詣りをあらわすことばである。代表的なものには、慶安三年(一六五〇)、宝永二年(一七〇五)、明和八年、文政十三年(一八三〇)、慶応三年(一八六七)などがあり、ほぼ六〇年を周期として発生した。

慶安三年の場合、武士以外の日本の人口約二、六五〇万人のうち、参詣者は三六一万を数え、日数五〇日間におよんだという。

これは「抜け参り」ともよばれ、着のみ着のまま、親・主人にも無断で旅立った。街道ぞいの人たちは、おかげ詣りを見ると争って飲食物や宿を提供した。

越水町には、おかげ参りの燈籠(一八三二)がある。

(北播磨の伝説・吉田省三編著より)

## 上若井の神石（上若井町）

上若井の釜坂峠の登り口東側の山裾すそに、こんもり茂った小さな森があります。この茂みの中に、女性の体の一部に似た形の石灰岩の塊があるのです。

安永の頃、釜坂さんと言う人の先祖が、山を崩して開墾していたところ、土の中から大きな石が現われました。小さくこわしてとり除こうと、その一部を割ったところ、にわかに頭が痛くなって来たので、そのまま家に帰って床についてしまいました。

ところが夜中に、夢の中で「この石をきれいに清めて、よい場所に移し真心こめてお祈りすれば、婦人の病気は必ず治る」というお告げがありました。それで早速人手を借りて今の所に移し、祠ほこらを建てておまつりしました。この話を聞いた峠の向う側（神崎郡）の日蓮宗のお坊さんが、開眼供養をし、開石かいせき愛染明王あいぜんみょうおうと名づけたといえます。

このうわさを聞いて、婦人病に悩む人たちがたくさんお参りするようになりました。病気が治ると紙の小幡を奉納する風習ができ、今でも多くの小幡が風にはためき、お供えものをしたり燈明があげてあります。

（播磨郷土研究第十五号藤田啓明氏の文より）



## 地名「若井」のいわれ（若井町）

日露戦争は、日本の有利のうちに終りを迎えました。

ところで、その戦利品が国からこの西在田の村社に、払い下げられました。一番古い神社にということ、下道山の氏宮に払い下げられる事になったのです。

ところが、若井から「若井の宮は、そのご神体が内裏だいりびな雛人形で、道山の宮より古い」という申し出が起りました。そこで、道山と若井の間では、「どちらの宮が古い宮なのか」がやかましく言い争われました。どちら側も、「自分の氏宮の方が古い」といって譲りません。ついに県・郡の役人立ち合いの上で、ご神体を改めることになりました。その結果、若井の宮のご神体の方が古いという結論になり、戦利品は若井の宮に払い下げになりました。

納得がいかないのは道山の人たちです。そこで、八方手をつくして古文書を見つけ調べてみると、古文書には、「天正十三年亥八月、西道山へ分社し、宮が若いのでこの地を『若井』と改める」とありました。戦利品は道山の宮に払い下げときましたのですが、なぜ、若井の宮のご神体が、道山のものより古いのかはよくわかりません。

（増田一夫氏の話より）

## 磯崎神社の雨乞い（下道山町）

道山の磯崎神社は、それはそれは霊験のあらたかな神様です。

長い間雨が降らないで、早魃で農作物に被害が出はじめると、村人たちはこの神社に雨乞いをしました。

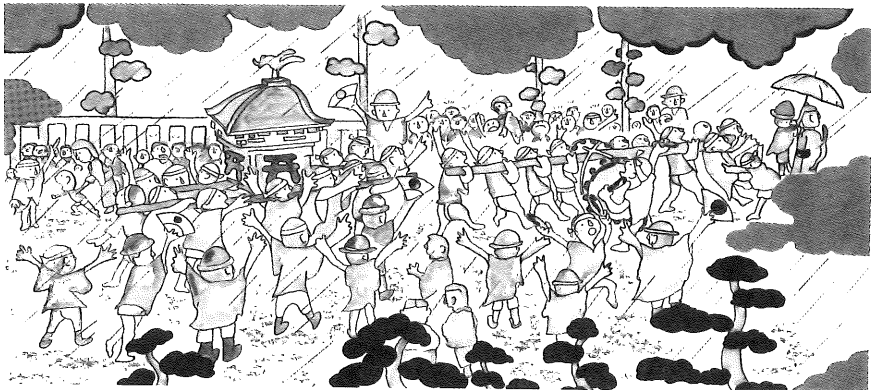
村中総出でお宮に集まり、お供えの後お祈りして、お御輿をかついでねりあるくのです。

御輿が東山（村はずれの平野）まで行くと、不思議に決まって雨が降ってくるのです。

村人たちは、しばしばこれを経験していますから、今でもこの神社は霊験のあらたかな神様だと、厚く信仰しているのです。

このお宮には、時代時代に奉納された絵馬が、たくさん掲げられています。その中でもひとときわ目を引く絵馬に、この雨乞いの模様を画いた「雨乞いの御輿還幸の図」があります。

早魃に困りはてた村人たちが、最後の悲願としてこの氏神に雨乞いをし、



神輿のご巡幸じゆんこうを仰いだ結果、恵みの雨が降り出した時の絵なのです。これまで青空であった空の一角から、黒雲が見えはじめ、見る見るうちに大空一面は墨を流したように黒くなって、稲妻が闇を裂き、耳をつんざく雷鳴らいめいとともに、大粒の雨が横なぐりに降りしきる中を、衣冠祭服いかんさいふくに身を正し右手に笏しやくを持った宮司を先頭に、神輿をかついだ駕輿かじちよう丁は全身ズブぬれになりながらも、歓声を磯崎の森にひびかせながら、打ち鳴らす大太鼓の音も勇ましく、鳥居をくぐって老松古杉の原始林の境内を、社殿へと還幸される絵図です。

(福井秀治氏の話より)

## 宮山の山鳴り (下道山町)

明治八年のことだったと思います。

春のある夜半すぎのことです。突然、宮山が「クワン・クワン・クワン」と鳴りだしたのです。野添の人たちや、金ヶ谷の人たちは、ただただ恐しさで、その夜はまんじりともせず一夜を明かしました。

その翌日、噂うわさはたちまち村中に知れ渡りました。村の人たちは、早速つれだって、おそるおそるお宮へ見に行きました。しかしお宮そのものには、何も変わったところがありません。そのまま一同は引き上げて来ま

した。

だが、その日の晩も、夜中になるとまた宮山が鳴り出したのです。そこで、村の長老や若衆が集まる天神さんの前まで行き、「ワーツ」と鬨とぎの声を上げてみました。一、三度上げてみると、山鳴りは「ピタリッ」と止まりました。みんなは、安心して引き上げて来ました。

でも、みんなが帰ってくると、また山が鳴り出したのです。

その翌晩も鳴り出したので、みんなはつれだって、今度は手洗い井戸の下まで行って鬨とぎの声を上げてみました。すると山鳴りは「ピタリッ」と止まりました。みんなは、また帰って来ました。

三日目の夜が明けて、宮山は何事もなかったかのように、もとの静けさにかえっております。

月日が流れて、やがて秋祭りの時期がやって来ました。

宵宮よひみやになって、御輿みこしを下してみて、びっくり仰天。あの三晩にわたって鳴り続いた山鳴りの謎が解けたのです。御輿の屋根が三方にわたってはぎ取られ、柱の釘かくしも全部抜き取られているのです。

上野の森での神事を明日に控えた今日になっては、どうすることもできず、御輿に墨を塗ってどうにか神式にまにあわしました。

今でも、拜殿の正面東側の天井に、盗賊侵入の穴が開いたままになっております。

(増田一夫氏の話より)

## 赤穂浪士奥野将監の住居跡（下道山町）

赤穂義士で名高い播州赤穂藩の所領が、正保の頃から元禄十五年（一七〇二）まで、字仁・日吉・在田・西在田にわたってあった。このため加西市は、久学寺をはじめとして赤穂義士とのつながりが非常に深い。

忠臣蔵の話は、映画や芝居に今も上演され知らぬ人はないが、上野の石部神社に残っている文書によると、領地から取り上げた年貢米は約六割強で驚くほど高く、上野村の石高四百石に対して、毎年二百六十石から二百九十石も徴収していたことがわかる。あの劇的な義士討入りも、その影に重税に泣いた領民がいることを思えば、まことにむなし。

ところで、赤穂浪士の一人奥野将監おくのしょうげんの隠れ住んだという住居跡が下道山の磯崎神社の馬場先にある。奥野将監は家老大石良雄に次ぐ浅野内匠頭の重臣で、事件後同志と主君の仇を討とうと誓ったが、大石良雄が山科はまので放蕩ほうとう三昧さんまいの生活を送っているのを見て、同志の首領がこの有様ではとうてい大望を果たせないとあきらめ、赤穂領であった下道山に来てわずかの田畑を求め農業をしながら余生を送ったという。屋敷跡は狭く、将監の墓石もいつのまにかなくなってしまっている。

また、同じ義士の一人潮田高教は、北条に深い縁故があつて、討入り前母親と妻子を北条にあずけたという。母親の墓は北条菊ヶ谷にある。

さらに小野寺重内の子孫や一族は、東長や両月町に残っている。

(播磨郷土研究第八号古家実三氏の文及び山崎茂氏の話より)

## 平野ひらのの不動岩(下道山町)

下道山の平野山にある岩は昔から、「平野の不動岩」と呼ばれています。

その昔、崇徳天皇の皇子が、ここに寺を建てられ、清水院と名づけて、不動尊を本尊に祀られました。ところが、後になって、この寺が赤松の兵火に焼かれたのです。この時、本尊の不動明王が、岩に化身されたというのです。不動岩がそれで、時々光を放つので光り岩とも呼ばれています。

(加西郡誌より)

まんどころ  
政所の屋敷（大内町）

「大内<sup>おおち</sup>」という地名は、昔、西道山村と呼んでいた。この地に、保元・平治の乱の頃、兵火をのがれて京から崇徳院の皇子為茂公が従者たちとかくれ住んだ。為茂公はもと大内王<sup>おおち</sup>とよばれていたので、この落人<sup>おちうと</sup>たちの村は「大内」というようになったと伝えられている。

大内町の中央には、広大な屋敷跡があり、みんなは政所<sup>まんどころ</sup>の屋敷とよんでいて、このことをうらづけている。

また現在北条町横尾小泉にある禅寺安永山樂法寺は、昔は大内町八王寺谷の麓<sup>とら</sup>にあつて、名も清水院八王寺とよんでいたそうで、今でもその寺跡<sup>てらあと</sup>らしい所が残っている。

（増田文一氏の話より）



## 十夜さん（大内町）

大内町に昔から伝わる行事のなかに、五月八日のお釈迦祭り、十一月十日の十夜さんがあります。そして、その当番を二軒ずつが順番にします。

お釈迦祭りには、れんげ・たんぼぼなど色とりどりの草花でお釈迦さまの屋根をふき、甘茶をたき、村人にふるまいます。

十一月十日の十夜さんの夜には、米を二斗（約三十キログラム）炊きます。そして、村の青年連がおにぎり作りを手伝ってくれます。この頃の夜ともなれば、かなり寒くなってきました。庭先に焚火たきびをして村人を待ちます。村人は大人も子どもも家中そろって、このおにぎりをもらいに行きます。

この十夜さんのおにぎりを食べると、夏まけをしないといわれています。

（福井かめ子氏の話より）